

# OKoTaC 通信

## オコタック

2015年12月31日発行

# NO.26



**P 2 NPO活動報告(1)**

『多文化にふれる えほんのひろば 2015』

**P 3 NPO活動報告(2)**

『外国人家族のための高校進学説明・相談会』

**多文化な子ども@大阪のニュース**

『サタディークラス 10周年パーティーを終えて』

**P 4 特別寄稿(1)**

『ピアにほんごの歩み』①

**P 5 Air Mail メキシコ便り④**

『グアダラハラ、テキーラ (前篇)』

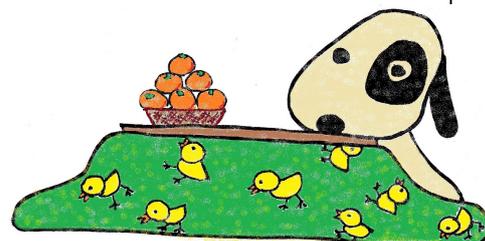
**P 6 みんなの日本語、みんなで NIHONGO! ⑥**

『子どもの気持ち』

**P 7 特別寄稿(2)**

『「定住外国人子ども奨学金」(兵庫)の活動紹介』②

**P 8 イベント情報**





## おおさか子ども多文化センター 活動報告(1) (子どもゆめ基金助成活動)

### 『多文化にふれる えほんのひろば 2015』

～ 出会ってわくわく! いろいろなおはなし、せかいのいろいろなおともだち ～』

10月17日(土)と18日(日)、西区の大阪市立中央図書館で、上記イベントを開催しました。外国から来た親子に母語の絵本を楽しんでもらうと同時に、日本人には身近な多文化の存在を知ってもらおうというこの企画、4年目の今年は日本語・外国語あわせて18言語、約700冊の絵本を展示し、例年を上回るのべ1500人以上の参加がありました。

「多言語おはなし会」では、外国人ボランティアさんに計8言語で読み聞かせをしてもらいました。出稼ぎから帰ってくる父親と春節を過ごす中国の子どものおはなしや、ボリビア人と日本人の両親を持つ女の子がそれぞれの国の好きなところを語っていく、スペイン語・日本語の二言語併記の絵本など、各国の文化にふれることができる作品が並びました。中でも、インドネシア出身の女性は小学生の娘さんと登場、母国の子どもの暮らしを描いた物語を、イスラム教のお祈りや子どものあいさつの仕方などの実演つきで紹介してくれ、参加者は興味津々で見入っていました。また、今年初めておこなった“多言語リレー読み=写真右”は、1冊の絵本を場面ごとに中・タイ・英・韓・日本語の5言語で交代しながら読んでいく試みでしたが、終了後湧きあがった大きな拍手と、読み手・参加者双方の満面の笑顔に、ことばが違ってもそれを超えて同じ気持ちを共有できることをあらためて実感でき、会場の一体感がとても感動的な時間になりました。



また「おはなしと音楽で韓国を感じてみよう」では、在日コリアンのピアニスト・柳水香さんを講師にお迎えしました。韓国の有名な昔話やキムチの作り方を描いた絵本に加え、韓国式ジャンケンや可愛い童謡なども一緒に楽しむ中で、日本との文化的共通点が多いお隣の国の空気に親しむことができました。



一つのおはなしをいろいろな言語で

毎年人気の「世界の文字を書いてみよう」のコーナーでは、今年も佐野高校を卒業したロシア人学生をはじめ、各国のスタッフさんが大活躍してくれました。中には自らビルマ文字指導の教本を持参してくれたり、会場に私の国の本もぜひ並べると、母語の絵本を寄贈してくれたりする外国の方もおられ、母文化の発信の機会を楽しみにしてくださっているお気持ちが、とても嬉しかったです。また、多言語の「ありがとう」を学び交流できる「ありがとうの木」のコーナーでは、用意された31の言語が、昨年度大阪府内の学校に在籍した外国人児童生徒の母語と同数だと聞いた日本人参加者が、地元こんなにも多くの外国ルーツの子どもがいたとは知らなかったと驚いていました。

さらに今年は、外国人スタッフさん自らの発案で、フロアで複数の言語のスタッフが組んでおこなう“ゲリラライブ”多言語読み語りもおこなわれ、参加者はこれまで以上に世界の絵本や外国語のひびきを、またそこから生まれる交流を、広く楽しむことができたのではないかと思います。絵本を介して互いに顔が見えるかたちで多言語・異文化に出会う中で、それぞれの母語が全て、かけがえのないことばであることを共有するとともに、絵本には人と人をつなぐ大きな力があることを再確認した2日間でした。

(A. N)



#### 「多文化にふれる えほんのひろば」に参加して――

(ボランティアスタッフ 上野山志津)

昨年に続き、今年も会場スタッフとして参加させていただきました。このイベントは、各国の美しい絵本たちが主役ではあると思うのですが、外国にルーツをもつ方たちにとって、話すこと、聞くこと、出逢うことの出来る大切な交流の場となっていることが、とても大きな意味をもっていると感じました。そして子どもだけではなく大人も、絵本を通して他の国の言語や文化に触れることが出来たり、今回から登場した「ありがとうの木」を使って外国人の方たちと色々な国の言語を使った挨拶を交わしてみたり出来る貴重な場所になっているのだと、日本語しか話せない、日本の文化さえ理解しているとは言えない私ですが、そんなことを感じながら過ごした一日となりました。

また今回は、長女も会場スタッフとして参加させていただいたのですが、普段、貿易関係の業務に就いている彼女にとって、仕事としてではなく、英語で色々な人と会話を楽しめたことは大きな収穫だったようです。また機会があれば、母娘揃ってえほんのひろばで「誰かの何か」を繋ぐお手伝いをさせていただきたいなと思っています。



## おおさか子ども多文化センター 活動報告(2)

### 「外国人家族のための高校進学説明・相談会」を開催

11月14日(土)、市民交流センターなにわで、上記「高校進学説明・相談会」を実施しました。オコタック主催としては初の進路ガイダンスで、当日は中国、フィリピン、ペルー、韓国、ネパールにルーツを持つ生徒や家族ら29名が参加、高校進学をはじめ、子どもたちの進路について熱く話し合われた3時間となりました。

来年度入学生の入試制度は大きく変わりますが、簡略な制度説明のあと、日本の中学校・高校を経験して現在大学に通う、中国ルーツ、フィリピンルーツの2人に、入試を前に悩んだこと、がんばったこと、また高校生活についてなど、先輩としての体験談を話してもらい、最後に受験生に励ましの言葉をもらいました。その後の個別相談の中でも2人は、自分たちが卒業した高校を希望している相談者に対し丁寧な対応をしてくれ、その姿はとて印象的でした。相談員として各テーブルについた高校の先生たちも、質問事項についてそれぞれ一番よく知っていそうなスタッフと確認しあったりして、ひとつひとつの疑問を確実に解消していこうとされていました。



最後の各言語別テーブルからの報告では、相談の時間も十分にあり細かいところまで話し合えて、疑問に思っていたことが解決された相談者も多かったことが確認されました。また、ひとつのテーブルで出た相談事項をあとで会場全体で共有したことにより、個々の参加者は進路を考える上で幅広く情報を得ることができたのではないかと思います。

(K. A)



### 多文化な子ども@大阪のニュース・・・・・・・・・・・・・・・・

#### 「サタディクラス 10周年パーティーを終えて」

10月17日(土)、サタディクラス10周年パーティーを無事終えることができました。来ていただいたお客様、スタッフ、ともに心に残るパーティーだったと思います。このパーティーの企画スタートからスタッフとして参加した児島が報告します。



まず初めに、サタディクラスの代表である坪内先生の挨拶のあと、当初からボランティアをされている野崎さんが「10年の思い出」と題し、スタートしたころの話、子どもプラザの時代、十三に移ってからのことなどについて語られました。その話を聴きながら、嬉しいこと、悲しいこと、辛いこと、やり切れないこと、いったいどれくらいあったのだろうか、と想像してしまいました。外国にルーツをもつ子どもやその親に長年にわたって関わってきた事務局、ボランティアさんたちにも野崎さんと同じような思いがきっとあることでしょう。とても濃い10年だと思います。

また、子どもたちにとっては、いろんなことがあっても、サタディクラスは、嬉しく、安心できる居場所になってきたことでしょう。それは、この10周年パーティーにも凝縮されていました。タイやネパールの民族舞踊を披露してくれた子どもたち、中国の歌や日本の歌、またラップを歌ってくれた子どもたち、パネルディスカッションに参加した子どもたちも、少し緊張してはいましたが、あとはリラックスして楽しんでいました。

パネルディスカッションに参加したサタディクラス出身の子どもたちの誰もが語ったコメント「頑張って努力をすれば、希望はかないます」。私は胸をうたれました。子どもたちにとって言葉に出せないことも多くあったと思いますが、それでもその言葉は強く、参加した子ども、大人に伝わり、受け止められたと思います。私は、まだ活動を初めて3年ぐらいですが、この10周年パーティーに関われてよかったです。改めて、国籍、背景に関係なく子どもたちが希望をもてるためのパーティーができてよかったです。

(サタディクラス ボランティア 児島良謙)





ピアにほんごロゴマーク

小川裕之(府教育センター教育相談室、おおさかこども多文化センター会員)

編集部より

「ピアにほんご」とは、2006年から始まった府立高校に在籍する渡日生のサポートを目的とした大阪府教育委員会事業「大阪府日本語教育支援センター」の愛称です。全国的にも先進的な取り組みとして注目されているこの事業をオコタックが受託して5年になります。そこで、今回から3回にわたって「ピアにほんご」のこれまでの歩みについて振り返ります。今回はまず、府教委でこの事業の立ち上げに中心的な役割を果たされた小川裕之さんに当時の思いを書いていただきました。

★ ★ ★

ピアにほんご事業立ち上げで思いだすのは、現在も実施されていますが、大阪府内での多言語進路ガイダンスでの学生の話です。彼女は小学低学年の時、両親に連れられ、中国から日本にやって来たが、みんなにいじめられ学校に行くのが苦痛だったという。両親も見知らぬ土地で生活することで神経を使い、時間の余裕がない状態だったので、両親に相談すると負担になると思い、いじめられていることを相談することもできなかった。小中学校はいやな学校生活だったが、高校では心を許しあえる友だちができ、語学系の大学に進むことができた。日本に来た時、相談に乗ってくれる人がなく、辛い思いをしたが、同じような境遇の子どもたちの話を聞いてあげられる人になって、日本との懸け橋になりたい、と語っていました。

小学校の小さな子どもが、親のことを思って、親にいじめのことなどを相談できないということ。そのことが私はとてもショックでした。周りの人や両親、先生が親を思う子どもの気持ちを理解し、なんらかの手立てを打てなかったのかと、その発表をする学生をまるで自分が受け持つクラスの生徒のことにように思ったことを今も思い出します。

最近、生徒指導の事案が生起するたびに、仕事に追われ、子どもたちをしっかりと見ることができなくなっている保護者の姿があり、子どもに向き合うゆとりがない中で成果を求められている先生方の現実があります。

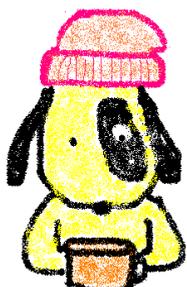
ピアにほんご事業は、それまでのそれぞれの団体が行うネットワーク型の情報発信だけではなく、リソースセンター設置(①情報の一元化②教育サポーター養成・スキルアップ③ネットワークをより充実させる大学・研究機関との連携など)を考え、支援する側される側、どちらにとっても情報を得ることができるシステムをつくることを目標に、事業化しました。

府立高校の帰国・渡日の生徒、保護者に対する支援として、今で言う斜めの関係、つまり教員でない外部者が学校現場で支援する『教育サポーター』を学校に入れることが、この事業の核となるものでした。それは、前述の学生の言葉がきっかけであったことはいうまでもありません。

子どもたちにとって教育サポーターとの出会いは、同じ母語を話す自分自身のモデルとなる人たちとの出会いになったと思います。教育サポーター養成研修では、初回から子どもに対する思いを共有できる、本当に子どもの自立を支援しようという人たちに集まっていただけの研修となったことを憶えています。

昨年、子どもの貧困対策の推進に関する法律が施行されましたが、この事業で支援すべき生徒は学校生活だけでなく、家庭でも居場所がない生徒がいるのです。ていねいに子どもたちに接し、思いをしっかり捉えていただいた教育サポーターの皆さんと行政、研究会、支援団体がお互いの良さを生かしながら本当の意味での連携を進めることができていることが、この事業のよさだと思っています。

子どもを中心に据えた支援をこれからも続けていただければと思います。





海外からのたよりをお届けします～

**メキシコ便り②④ 「グアダハラ、テキーラ(前篇)」**

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

メキシコのお酒といえばテキーラ、いろいろな飲み方がある中で、カクテルのテキーラ・サンライズはあまりにも有名です。私もテキーラが大好きでよく友人と飲むのですが、私の飲み方は彼がやっているやり方で、小さな細長いグラスにテキーラを入れ、そのグラスを持った手の親指の付け根あたりに塩をのせます。そしてもう片方の手でレモンといわれる、こちらのレモンで小さなすだちのようなものをかじりつつ、塩をなめながら飲むのです。テキーラの高いアルコール度による強い刺激をこの辛さとすっぱさがほどよく緩和してくれ、まろっとしたさわやかさに変えてくれるのです。人によってはレフレスコとよばれるコーラや炭酸飲料、ジュースを混ぜたり、水割りにしたりと本当に人それぞれで楽しんでいます。



店で飲むとサングリアと呼ばれるトマトジュースがついてでたりもします。値段はピンキりで高いものは数万ペソ(数十万円)もするそうですが、だいたい平均すると500ペソ(約5千円)くらいから安いものだと50ペソ(約500円)くらいでしょうか。私はもちろん安いものしか飲めませんが……。

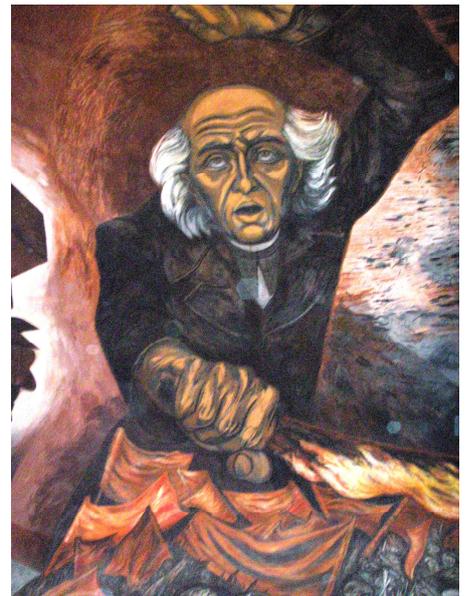
このテキーラの産地、グアダハラに行ってきました。グアダハラは人口165万のメキシコ第二の都市で、ハリスコ州の州都です。メキシコの民族音楽マリアッチ誕生の地であり、リベラ、シケイロスと並ぶ三大壁画家のひとり、クレメンテ・オロスコの生誕の場所でもあります。

メキシコシティからバスで北に約7時間。夜中にメキシコシティを発ち、着いたのが朝7時ごろ、街はもう動きだしていました。宿に荷物を置き、コーヒーをゆっくり飲み、さあ行動開始です。私がここでも見えたかったのがハリスコ州庁舎にあるオロスコ作の「立ち上がる僧侶イダルゴ」の壁画と、もちろんテキーラの生産工場でした。

まず、カテドラルに面した街の中心のソカロに向かい、すぐそばにある州庁舎に行きました。メキシコ独立の英雄であるイダルゴ神父が、ここグアダハラで宗主国スペインに対して独立闘争を開始したのです。イダルゴ神父の壁画を探しながら中央階段を昇っていくと突然眼前にイダルゴ神父が現れました。階段を覆うように天井まで描かれた壁画の中で、大きな大きなイダルゴ神父が両手に武器を持ち、スペイン人と戦っていました。その顔には深いしわが刻まれ、戦いの過酷さを物語っているようでした。

イダルゴ神父が1810年9月、ここで行ったスペイン打倒のための「ドロレスの叫び」は、メキシコ独立への第一歩になり、多くの人々が戦いに立ち上がるきっかけになったのです。しかし、彼は1811年7月にチワワでその志なかばでスペインに捕らえられ、政庁舎で銃殺刑にされます。そして、首は晒されました。私はチワワに行った時、その場所を見ましたが、今では殺風景な、なにもない広場でした。

私はしばらく階段に座り込んで、この壁画を見ながら、苦難のイダルゴ神父の最期と、多くの血が流されたメキシコ独立の歴史に思いをはせ、合掌していました。





## みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑥

### 「子どもの気持ち」

吉田 芙美（おおさかこども多文化センター 会員・日本語教師）

私は大阪市内の小学校で、1年生から3年生までの日本語指導が必要な児童に日本語を教えています。子どもに日本語を教える中で、気づかされることが多くあります。

まず、小さい子どもにもプライドがあること。1年生の A 君は日本生まれで日本と母の国、父の国を行ったり来たりしています。日本での生活経験もある程度あるし、明るくおしゃべりな性格なので、話すのはほかの子どもたちとそんなに変わらないように見えます。しかし実は彼はひらがなの読み書きがあまりできません。「う」とか「ん」とか得意な文字はありますが、五十音を最初から言わせても「あいうえおさしすせそ」とか言ってしまい、単語を読むのも五十音表を見ながらでもなかなかうまくいきません。

それでもみんなと一緒に単語を読む練習をするときには、一文字でもわかるとそこから類推できることばを言ってみて、「読める」アピールをします。書くときは、隣の子どもの答えをこっそり見て書こうとします。もちろん読解などとてもハードルが高くて一人では無理なのですが、それでも一緒に読もうとします。そして、耳で聞いてわかったことからなんでもいいから答えようとします。ときには関係のないことでも知っていることを一生懸命言おうとします。私たちはそんな子どものプライドを傷つけないように、かつできるところまではしんどくても自分の力でがんばるように、押したり引いたりしながら指導しています。



次に、子どもでも目的がわからないと勉強したくないということです。例えば、犬の絵カードを見せて「これは何ですか」「これは犬です」と言ってみせても、「なんでわかりきったことを言わなければならないのか」と思うと、練習しようとしません。大人なら「今ことばを勉強しているのだから」と理解してくれますが、その自覚がない子どもの場合、練習の意味がわからないのです。そのようなとき、絵の一部を隠して当てさせるクイズにしたり、カードを裏返してどのカードが何の絵かわからないようにしてあてるゲームにしたりします。それでも「わからないから言えない」という子どももいますが、その場合は文字カードとペアにして合わせるゲームにすると楽しめます。子どもだけがわからないのではなく、みんなもわからない状況や、指導者がわからなくて子どもが知っているという状況を作ると、子どもは喜んで考え、教えてくれます。

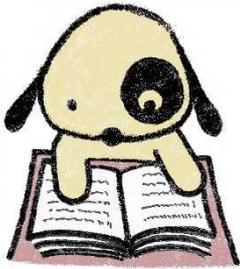
そして、モチベーションが大切だということです。子どもの場合、ほぼ 100%保護者の都合で日本に連れてこられ、自分が日本にいる意味がわからない子どももいます。また、保護者が「日本の生活がうまくいかなかったらすぐ国へ帰ろう」などと思っていたら、子どもは敏感にそれを感じ取ります。すぐにまた祖国に帰っていたら、仮の住まいである日本でことばを覚えたり、友だちを作ったり、学習したりする意欲はあまり湧きません。



でも、私たちは家庭の事情には口をはさめませんので、学校で子どもが意味を見つけられるようにしなければなりません。つまり、クラスメートと一緒にいたい、コミュニケーションを取りたい、クラスで認められたい、という気持ちを持ってもらえるようにすることです。もし、先生が子どもたちの態度がよくないなあ、勉強に気持ちがむいていないんだらうなあと思われた時、ひょっとしたら子どもにはどうにもならない家庭事情があるのかもしれないかもしれません。先生方には、日頃、日本語ができなくても子どもが活躍できる場を作ってもらえるようお願いしていますが、子どもによっては今あげただけでなくさまざまな理由で頑張れない時期があるかもしれません。しかし、私たちは子どもができるだけ自分でがんばろうという気持ちがわいてくるような、そんなサポートをしていきたいと思っています。

## 特別寄稿 「定住外国人子ども奨学金」(兵庫)の活動紹介 ②

山本晃輔(大阪大学特任助教、おおさかこども多文化センター会員)



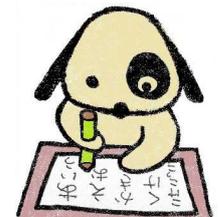
定住外国人子ども奨学金(以下、奨学金)は毎年3人の奨学生を受け入れており、3学年9人に奨学金を支給している。対象は外国にルーツを持つ兵庫県在住の高校進学予定者である。奨学金では8期生24人の奨学生を受け入れてきた。子どもたちのルーツは表のとおりで

ある。毎年、兵庫県下の様々な地域から10人前後の申請がある。申請には家族の経済状況や学業状況を記載する応募書類、推薦書が必要となる。多くの場合、受給希望者は学校の教員、もしくは学習会活動などの支援者から紹介され奨学金を申請する。最終的には、定住外国人子ども奨学金実行委員(以下、実行委員会)による面接がある。希望理由や経済状況、ロールモデル人材としての資質を加味して奨学生を決定する。理想は全ての希望者に奨学金を支給することであるが、限られた資源で活動しているため、受け入れ人数を限定しなければならない。選考過程については、概要を下記HPのニュースレターで報告しているので、詳しくはそちらをご覧ください。

1期生	ペルー、ベトナム、コリア
2期生	中国、ペルー、ペルー
3期生	中国、ベトナム、ベトナム
4期生	中国、ペルー、フィリピン
5期生	中国、フィリピン、ベトナム
6期生	中国、メキシコ、ペルー
7期生	中国、中国、フィリピン
8期生	コロンビア、ベトナム、コリア

奨学生の様子を確認するため、学期ごとに面談を行っている。面談では生活状況や、学校での成績、出席状況について話をする。奨学生の成績は「それぞれ」といったところである。学校ごとに成績の基準が異なるため、一律に成績を比べるようなことはせず、過去の成績と比べたときの伸び率や出席状況、遅刻回数を確認している。面談では出席状況や遅刻が話題になることが多い。それは「サボリ」を注意するというだけでなく、奨学生の生活状況とも関係しているからである。

奨学生の多くは、日本国内での進学を卒業後の目標としている。これまで送り出した奨学生は国立を含む四年制大学や専門学校に進学している。奨学生の進路決定までの過程を振り返ると、成績以外の課題もみえてくる。例えば、進学先を決めるための具体的な情報を持っていない奨学生もいる。こうした外国にルーツを持つ子どもたちの「進学情報の欠如」という問題はよく知られており、「進路説明会」などの取り組みが各地で行われるようになった。奨学生の様子をみていると、「進路説明会」や学校での進路指導を活用するだけでなく、実行委員や先輩奨学生、ボランティアの大学生を通じて進路情報を獲得している。奨学生にとって奨学金での人間関係とは、学校外で「進路や学校について親しく相談できる知人」であり、進路を決める際の良い相談相手となっているようだ。



その他にも「進学先を決める」だけが課題ではなく、お金の問題にも取り組んでいる。それは進学を希望する大学ごとに受験時には検定料が必要になる。合格者は一定期間の間に入学金の一部を支払わなければならない。また入学が決まれば、引っ越しや大学に通うための諸費用も発生する。ところが、日本の教育現場において「お金」の問題は「家族で考えること」であると扱われがちである。受験に向けての金銭的な備えは、日本の教育費への理解や家族の長期的な将来設計を必要とする。奨学生とその家族が「受験時にここまで金がかかるなんて知らなかった」というのも無理のない話である。そこで、本奨学金では高校在学中そして卒業後に必要となる「お金」に関するレクチャーも行うようになった。シビアであっても奨学生が向き合わなければならない問題に、本奨学金では一緒に知恵を絞って取り組んでいる。

→次回は、本奨学金の運営に関してご紹介します

定住外国人子ども奨学金(<http://www.social-b.net/kfc/scholarship/>)



## イベント情報

### 「第2回 識字・日本語学習研究集会」～よみかきことば・つながるための学習を支援する～

- 【日 時】1月30日(土) 10:00～16:30 全体会(10:00～12:00) 分科会(13:30～16:30)  
 【場 所】大阪教育大学天王寺キャンパス西館ホール 【定 員】150人 【参加費】無料 (一時保育あり)  
 【対 象】識字・日本語教室参加者、夜間中学校関係者、学校教員、行政担当者、市民団体関係者など  
 【全体会】野山広さん(国立国語研究所) 『識字・日本語学習をめぐる新たなうねり(仮)』  
 【分科会】C分科会ではオコタックの「府立高校生による地下鉄多言語通訳ボランティア」報告を予定  
 【主 催】大阪教育大学 教職教育研究センター／識字・日本語学習研究集会実行委員会  
 詳細はNPO法人おおさかこども多文化センターのホームページ(<http://okotac.org>)を参照

～以下の学習会は「おおさかこども多文化センター」主催のイベントです～



### 外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会

(大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業)

#### 「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ

～多様な子どもたちの日本語指導を考える～

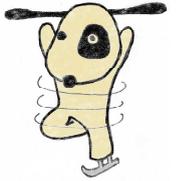
- 【講 師】二口とみゑさん(一般法人HOPEプロジェクト代表)  
 【日 時】1月31日(日) 午後1時30分～4時30分(受付午後1時～)  
 【場 所】大阪市立阿倍野市民学習センター(阿倍野区阿倍野筋3-10-1-300 あべのペルタ3階)  
 【定 員】50人(先着順) 【資料代】500円(オコタック会員は300円)

#### 「外国にルーツがあり、特別支援が必要な子どもへの日本語指導を考える

～多様な子どもたちの日本語指導～

- 【講 師】藤川 純子さん(四日市立笹川西小学校教諭)  
 【日 時】2月20日(土) 午後1時30分～4時30分(受付午後1時～)  
 【場 所】大阪市立市民交流センターなにわ 202号(浪速区浪速西1-3-10 JR環状線芦原橋西へ100M)  
 【定 員】50人(先着順) 【資料代】500円(オコタック会員は300円)

★上記2講座とも参加申込はお名前・所属・住所・電話番号・メールアドレスを明記の上、下記の奥付欄のメール・FAXのいずれかでお申し込みください。詳細はホームページ(<http://okotac.org>)に



NPO法人 おおさかこども多文化センター (OKoTaC) 代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町1-7-7 CE西本町ビル8階

Tel/Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL <http://okotac.org>

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ゼキウキウ))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824

口座名義『NPO法人 おおさかこども多文化センター』

(〇ガナ:トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター

